

国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」論

——〈復元〉と〈政治〉の諸相——

陰 能 成 央

序

国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」は、一九〇一（明治三十四）年『小天地』（金尾文淵堂）に発表された小説であり、現在では独歩の代表作として知られている。テキストの後半では作中人物の岡本が「驚異思想」を披瀝するが、その内容は極めて晦渋で、多くの先行研究がここに論考の核心をおいてきた。また、独歩が「主人公岡本誠夫の性格は余が好むまゝに描きしなれど彼の演説は余の演説である」⁽¹⁾と語っていることから、岡本は「作者・独歩」という存在と重ね合わされ、いわば特権的な地位を与えられてきた。しかしながら、既に山田博光氏などが指摘しているように、『牛肉と馬鈴薯』は独特な構成の小説⁽²⁾なのであって、テキストの構造にも注意を向ける必要があるのである。

そして、鷲崎秀一氏は「近世文芸の残像」「諷刺小説のよきな仕立て」⁽³⁾を作品に見出すが、この論には大いに示唆を得た。本作品における思想・哲学は、必ずしも深刻さ・切実さを伴っていない。ただし、テキストが包摂する「近代」の要素もやはり大きく看過できない問題であるから、本作品と同時代とのあり方と、本作品の「戯画」としてのあり方との両様を追う必要があるろう。

本作品を同時代的な位相から捉えなおすとき、極めて重要な意味をもつのが「明治倶楽部」という舞台設定であるが、「倶楽部」の一般的な性質を本作品に当てはめるのは不十分である。本作品の語り手は「今はなくなつて了つた」「明治倶楽部」をあえて〈復元〉させて語っているのであるから、本作品は実在した明治倶楽部の実態を視野に入れながら論じられなければならない。明治倶楽部や同時

代の要素は、作中人物相互の關係に強く影響を及ぼしている。それらの要素に光を当てていきながら、孤高の存在として特別視されがちであった「岡本」像を見直し、本作品の性質に迫っていきたい。

—

まずは、本作品の「主人公」である岡本について、検討を試みたい。岡本は、六名が人生論を語り合っているなかに突如現れ、「僕のは岡本君の説とは恐らく正反對だらうと思ふんでね」と上村に宣言される存在であり、⁽⁴⁾冒頭部の岡本は、明らかに周囲の人間と差別化されて描かれていた。

傍の卓子にウキスキーの壺が上て居て、こつぶの飲み干したるもあり、注いだま、のもあり、人々は可い加減に酒が廻はつて居たのである。(傍点原文)

これは岡本が「明治倶楽部」に入室した際の描写である。酒を飲んでいない岡本と、酩酊状態のその他六名という構図である。ところが、テキストの終盤に入ると

『否！』と一声叫けむで岡本は椅子を起つた。彼は最早余程酔つて居た。

という描写があり、明治倶楽部の七人がすべて酩酊状態に入っていることがわかる。そしてこの後、決定的な発言が

岡本から発せられるのである。

『もう止みましょう！ 無益です、無益です、いくら言つても無益です。……ア、疲労た！ しかし最後に一言しますがね、僕は人間を二種に区別したい、曰く驚く人、曰く平気な人……』

『僕は何方へ属するのだらう！』と松本は笑いながら問ふた。

『無論、平気な人に属します、こゝに居る七人は皆な平気の平三の種類に属します。(中略)』

本作品における岡本像について、鷲崎氏は次のように考察している。

とくに注目されるのが、「喫驚しちやアいけませんぞ」という前置きをした後、「静に」、「喫驚したいといふのが僕の願なんです」と語る、その語り口である。岡本の語りは、まさしくサゲを構える落語家のそれである。(中略) 気難しい思索家のように見える岡本は、じつは洒落の分かる男であり、遊びを意識して語ることができる男である。⁽⁵⁾

さらに鷲崎氏は「岡本は、酔つた「俗物」を相手に「不思議な願」を語っていた。彼がときにおどけたような語り方をするのは、酒場で「俗物」を相手にするにはやむを得ない方法ではなかったか」と指摘するが、岡本は「俗」的な側面を多く持ち、周囲と同化して語り出す人間として描

かかっている。岡本が「洒落の分かる男」であることは確かであるが、作中人物を「岡本」と「(その他六名の) 俗物」という形で区分することは適當でないといえよう。

また岡本は、自身の「不思議なる願」を明かす前に、いくつかの「願」を挙げている。

・ 実に彼少女の今一度此世に生き返つて来ることは僕の願です。

・ ビスマルクとカプールとグラツドストンと豊太閣みたやうな人間をつきまぜて一鋼鉄のやうな政府を形り、思切つた政治をやつてみたいといふ希望があるに相違ない、僕も実にさういふ願を以て居ます

・ 聖人になりたい、君子になりたい、慈悲の本尊になりたい、基督や釈迦や孔子のやうな人になりたい、真実にさうなりたいたい。

・ 僕も大哲学者になりたい、ダルキン跳足といふほどの大科学者になりたい。若しくは大宗教家になりたい。ここで注意を向けたいのは、岡本が「いくつかの望み」を直接「否定」しているわけではないことである。本作品に「アイロニー」の性格を認める関氏は、次のように考察している。

後半部では岡本の「不思議な願」が語られるが、そこでも彼は社会的に望ましいと思われている願いを次々に挙げ、一応はそれらを認めたとえで、アイロニカル

に転倒させていくことになる。(6)

岡本は「不思議なる願」ではない「願」に関しても「一応はそれらを認め」ている。またそれらの「願」は確かに「社会的に望ましいと思われている」ものが多くを占めるが、「少女の今一度此世に生き返つて来ること」に代表されるやうな個人的な「願」も含まれていることも確認しておきたい。岡本は、単なる一般的な例示としてではなく、「真実にさうなりたいたい」ものとして願を列挙しているのである。ここに岡本の極めて人間的な側面、「俗」性が認められるのであり、岡本はその「俗」性をもって明治倶楽部の人間に同化してゆくのである。

また、近藤が岡本の「苦痛の色」を看取する結末について、関氏は

結末部では、岡本が「喫驚したい」という願いを、「単にさう言ふだけ」と自己言及的に引き下げる。その発話はアイロニカルな否認のほゞであるにもかかわらず、ほとんどの聴衆はそれを理解しようとしなない。わずかに異分子的な存在である冷笑家の近藤だけが「岡本の顔に言ふ可からざる苦痛の色を見て取った」という結びは、この小説の総体としてのアイロニー性を指し示している。(7)

と述べ、岡本の言説の「アイロニー」に気付かない聴衆と気付く近藤とに及ぶ「選別作用」を指摘している。確かに、

本作品の結末は「岡本と近藤」と「その他五名」との差異化を読者に印象づけるが、近藤は決して岡本の完全な理解者としてあるのではない。それは、次のような記述を見れば明らかである。

〔近藤〕「岡本君の談話の途中だが僕の恋を話さうか？

一分間で言へる、僕と或少女と乙な中になつた、二人は無我夢中で面白い月日を送つた、三月目に女が欠伸一つした、二人は分れた、これだけサ。要するに誰の恋でもこれが大切だよ、女といふ動物は三月たつと十人が十人、飽きて了う、夫婦なら仕方ないから結合いて居る。然し其は女が欠伸を噛殺して其日を送つて居るに過ぎない、どうです君はさう思ひませんか？」

〔岡本〕「さうかもしれませんが、然し僕のは幸に其欠伸までに達しませんでした、先を聴いて下さい。〔略〕」

〔近藤〕「略」 どうです岡本君、だから僕は思ふんだ君が馬鈴薯党でもなくピフテキ党でもなく唯だ一の不思議なる願を持つて居るといふことは、死んだ少女に遇ひたいといふんでしよう」

〔岡本〕「否！」と一声叫んで岡本は椅子を起つた。近藤は、岡本の話の途中で「欠伸」の話を差し込んで「さうかもしれませんが」とあしらわれ、また岡本の話の核心ともいえる「不思議なる願」について「死んだ少女に遇ひた

いといふんでしよう」と推測すれば、「否！」と強く否定される。テクスト全体においては、「岡本・近藤」と「その他五名」で区分することも適当でないといえる。

こゝまで、岡本や近藤を孤高の存在としてみることはできないことを確認した。明治倶楽部の七名は、俗／非俗の次元で区分することはできない。その要因として、稿者は「明治倶楽部」という舞台設定を挙げたい。「或年の冬の夜」に「明治倶楽部」という閉鎖的な討論空間に集つた七名は、各人の思想の違いはあれど、同類・仲間としての要素が強く表出する。ここからは「明治倶楽部」を中心に、作品の性格に踏み込んでいきたい。

二

本作品の舞台として設定されている「明治倶楽部」の閉鎖性については、例えば人力車夫が近藤に金を無心する場面にもあらわれている。車夫の申し出は給仕による伝言という形で近藤に伝わる。名刺一枚を差し出して入室を許可された岡本とは対照的である。この場面における近藤の姿について、井上明芳氏は「現実を嗜好する」はずの近藤が「車夫からの借金の申し出を拒絶」し、「目の前の現実をなにごとにしてしま」つたことに着眼し、「自分自身を脱構築してしまふ在り方が捉えられる」と指摘したうえで、次

のように述べている。

明治倶楽部についての説明とその外に車夫が博奕をしている描写で「牛肉と馬鈴薯」がはじまっているのは、明治倶楽部が内部であり、その外部が厳然たる事実として存在していることを示していたのである。(8)

「明治倶楽部」の外から描写を始める語り手は、その後岡本と共に「明治倶楽部」に侵入する。その冒頭が岡本と語り手の緊密な関係を印象づける一方で、語り手は討論に参加せず(9)、あくまでも客観性を持って「討論小説の語り手」としての役割を果たすのである。

作中人物の討論空間に限定性を付与する「明治倶楽部」という存在、また広く捉えて「倶楽部」という存在は、作品発表当時どのような存在としてあったのか、詳しく検討してみたい。

冒頭で「明治倶楽部とて…可なりの建物があつた」と語り手が述べているとおり、「明治倶楽部」は史実として存在した組織であり、一九〇七(明治四〇)年出版の『日本社会事彙』「倶楽部」の項には用例として「明治倶楽部」の名が認められる。(10)さらに、一八八八(明治二十一)年九月七日の『国民之友』第二九号には次のようにある。

後藤伯の丁亥倶楽部を昨年末組織せられてより、頃ろ改進黨派の組織せられたる明治倶楽部なる者起り、又た井上伯の組織せられたる倶楽部も、渋沢、増田等の

諸氏が尽力せらるゝと云へり、兎に角今後は倶楽部繁昌の世となり可し。(11)

さらに同時代文献を追っていく。一八八八(明治二二)年の『国民之友』二八号では「時事・明治倶楽部」と題し、以下のように「明治倶楽部」の設立を報じている。

改進黨派及び同臭味の人々は、頃ろ明治倶楽部なる者を組織せられたり、此の倶楽部や、唯た懇親を表する迄の者にして、敢えて直接に政治上の目的を以て組織したる者に非ざれども、其会員たる者は、名にしおふ政治思想に富みたる方々なれば、国会開設の時に於ては、或は英国リベラル党の国民倶楽部丈の効用を為すに至るも未だ知る可からず〔略〕

また同年八月一四日の『朝日新聞』朝刊では、「明治倶楽部」との見出しで

府下の紳士が富士見軒に会して倶楽部設立の事を議せるよしハ前号に記せしが猶ほ聞くとくところによれば該倶楽部ハ明治倶楽部と称し都合十一箇条の規則あり其目的ハ同好の人相会して懇親を結ぶに在るとハ第一条に記する所にして成るべく同好の士を広く募る目的の由なるが已に其会員となるもの六七十名あり富士見軒の会に於て須藤時一郎田口卯吉藤田高之吉田熹六青木匡高田早苗加藤政之助の七氏を幹事に選挙せしと同好の人が懇親を結ぶを以て目的とすと称すれど同好とハ何

が同好なるか之れが主義好尚の如何ハ之を知る能はず
兎に角会員中にハ改進黨員の多きを見るのみ¹²

と報じられている。三文献ともに「改進黨」の文字が認められることは印象的である。明治倶楽部は本作品発表の一九〇一年に解散したとみられ、一九〇一年四月一日の『朝日新聞』朝刊では明治倶楽部の解散論が報じられている。

明治倶楽部ハ世人の知る如く一種の社交的機関なるが同会員中の一部人士ハ此程来類に倶楽部の解散を唱へ居れり〔中略〕同会員中の増島六一郎、廣澤金次郎、陸奥廣吉等諸氏の間此度進歩党にも政友会にも關係なき一種の新政党を組織せんとの相談成立し一時明治倶楽部を解散して異分子を排斥し更に同倶楽部の名に依りて黨員を糾合せんとの策略にて現に再昨日前記の三氏帝国ホテルに密会し種々協議を凝らし彌々本日倶楽部員の総会に解散論を持出す迄に進行せりと云ふ

「異分子を排斥し」という文言に「倶楽部」のもつ閉鎖性が伺えるが、ここで重要なのは、「明治倶楽部」の組織・解散にも〈政治〉が大きく関与していることである。實在の明治倶楽部が「同好の人相会して懇親を結ぶ」単なる「一種の社交的機関」ではなく、政治性を包摂した機関であったことは明白で、さらに政治思想の近い人間の集まる組織であったということが出来るであろう。作中の「明治倶楽部」は政治性が希薄であるものの、本作品にあらわれる「俗

物党」「馬鈴薯党」「牛肉党」「ビフテキ党」といった記述は政治団体としての「党」を、また「岡本誠夫（セイフ）」という名前は「政府」を想起させ、テキストに政治性を付与している。本作品の作中人物と明治倶楽部の幹事が七名で符合することも興味深い事実である。

「同好の士」の集団においては、あらゆる前提のもとに会話が行われ、論理飛躍するのが常である。本作品の「明治倶楽部」は閉鎖的な討論空間として描写されるが、そこは抽象的かつ高踏的な会話が行われる、極めてハイコンテクストな空間であった。岡本が「明治倶楽部」という討論空間に入っても、「未だ見識らぬ人」である上村が自己紹介をするまでは「容易に坐に就かな」かったのは象徴的である。名刺の提出、人物紹介、挨拶という作業は、ハイコンテクスト空間において必要不可欠な、文脈の確認行為であったのである。

三

小説と政治の関わりといえば「政治小説」が思い起こされるが、本作品発表の二年前に当たる一八九九（明治三十二）年九月、内田魯庵によって「政治小説を作るべき好時機」という随筆が提出されている。随筆は「小説家よ。卿等が恋愛世界に注ぐ観察を一転して政治界近日の大変革

を見よ」との書き出しで始まっており、「政治小説の価値は姑らく置き、今日政治界の情勢日に益々滑稽なるを見て転た政治小説を作為すべき最高機なるやを思ふ」と魯庵は主張する。興味深いのは、一八九八（明治三十一年）年に没した政治家、グラッドストーン、ビスマルクの名が見られることである。

グラッドストーン及びビスマルクの二巨人相続いて逝き、十九世紀は唯だ残滓の沈殿するを見るのみ。「中略」憲政党は内閣を組織し政治界は俄に乱調子となる。

(13) ここで思い合わされるのは、魯庵随筆の三年後に発表された本作品における、岡本の台詞である。

諸君は今日のやうなグラ／＼政府には飽きられたらうと思ふ、そこでビスマルクとカプールとグラッドストーンと豊太閤みたやうな人間をつまませて一鋼鉄のやうな政府を形り、思切つた政治をやつてみたいといふ希望があるに相違ない

岡本の言う「今日」は、作品発表の一九〇一（明治三十四）年を指すのではない。本テクストは、①冒頭で語り手が「今では明治倶楽部其者はなくなつて了つた」と述べる「語り手時点」、②明治倶楽部で作中人物が会話をを行う「明治倶楽部時点」、③作中人物が自身の体験を述べる「回想時点」の三つの時点に大きく区分される。明治倶楽部で

の会話のなかで両政治家の名前が挙がるわけであるから、この「今日」とは②の「明治倶楽部時点」を指すのである。

実在の「明治倶楽部」は一九〇一年に解散している。「今」（語り手時点）は既に「明治倶楽部」は「なくなつて了」つていたのであるから、「①語り手時点」は一九〇一年に定めるほかない。そして「②明治倶楽部時点」であるが、岡本がビスマルクとグラッドストーンの名を挙げていることのも理由として、両政治家の逝去に関心が寄せられている時代状況を疑つてみることはごく自然であろう。すなわち、両政治家の逝去が話題性をもつたであろう一八九八年、あるいは翌年の一八九九年頃に「明治倶楽部時点」が設定されているとみてよい。明治倶楽部における会話において、例示される実在の人間（「カプール」「ダルキン」など）全てが「②明治倶楽部時点」で既に故人であったことは、この推論を裏付ける。今はなきものを語る、という語り手の姿勢をここでも垣間見ることができるのである。

史実では、一八九七年に明治倶楽部拡張の相談が行われている。したがって、一八九八から一八九九年頃までは明治倶楽部が「未だ繁盛して居た頃」であるといえるから、冒頭で語り手が述べる条件にも適合する。一九〇〇年以降は、政治的画策により倶楽部が解散へと向かつてゆくため、「繁盛」しているとはいえない。(14) 本作品の語り手は、二三年前の「明治倶楽部」を〈復元〉していたとみること

ができる。

続いて「③回想時点」を検討する。「明治倶楽部」の会話では上村の「同志社」卒業が「十三年」前であると明かされるが、これは右の推測から単純に計算すると、一八八五（明治一八）年または一八八六年のことであると推定される。上村は、その卒業から「一年ばかり東京でマゴゴして居」た後、北海道へ旅立つ。発言は曖昧で正確さを欠くが、上村の渡道は一八八六年から一八八八年頃と推定される。上野駅の本駅舎竣工が一八八五年であるからこの点でも矛盾しない。

魯庵の言説の内容にも目を向けておく。矢野龍溪の『経国美談』明治十六十七年刊）などに代表される『政治小説』の再興を期待するかのような言説が、明治三十二年にあらわれている。現実の政治を写実するだけで「滑稽」な話を書けるほどまでに、（当時の『明治三十年代』）政治が乱れているという文脈であろう。本作品は「政治小説」を（復元）するような立場を取り、政治の風刺・戯画化を行って行く。しかし内田魯庵の主張する「政治小説」そのものではないことは、岡本の恋愛談が登場することなどからも明白である。政治の（復元）は、あくまでも作品独自の方法で行われるのである。

四

岡本は「喫驚したい」という「不思議なる願」の他にも様々な「願」を持っていた。その一つが「思切つた政治をやつてみたい」という「願」である。ピスマルクはドイツ、カプーラはイタリア、グラッドストーンはイギリスの政治家であるが、この記述から想起されるのが一八八一年に起こった明治十四年の政変である。

明治十四年の政変は、憲法制定をめぐる政府内の論争のなかで、大隈重信をはじめとする非藩閥勢力が排除された政治事件である。法学や歴史学の域に深く立ち入ることは避けるが簡単に確認をしておく、このとき、伊藤博文（のち立憲政友会）・井上毅ら藩閥勢力は君主大権を認めるピスマルク憲法を支持、イギリス型の憲法を支持した大隈重信らを追放し、薩長藩閥政権が確立した。そして政府から追放されることとなった大隈らが新たに結成したのが立憲改進党であったのである。実在の「明治倶楽部」の多くを立憲改進党員が占めていたことを考えれば、先の岡本の台詞は非常に示唆的なものとなる。「明治倶楽部」を舞台に岡本が行なったのは、「ドイツ・イギリスの政治家の名前を挙げながらも、「ドイツかイギリスか」の二者択一ではない形、すなわち「鋼鉄のような政府」という新たな対立軸を設定するという営為であった。岡本のこの姿勢は、テク

ストの前半部分で既に宣言されていた。

(近藤)『略』君等は牛肉党なんだ、牛肉主義なんだ、僕のは牛肉が最初から嗜きなんだ、主義でもへチマでもない！

『大に賛成ですなア』と静に沈重いた声で言つた者がある。

『賛成でしやう！』と近藤はにやり笑つて岡本の顔を見た。

『至極賛成ですなア、主義でないと言ふことは至極賛成ですなア、世の中の主義つて言ふ奴ほど愚なものはない』と岡本はその沓え沓えくした眼光を座上に放つた。

(傍点原文)

ここでは、岡本と近藤によって「主義」という概念が相対化される。「牛肉党」でもなく、「馬鈴薯党」でもない立ち位置をとり、ドイツでもイギリスでもない「鋼鉄のような政府」をつくりたいと願う岡本は、政治性を包摂する「明治倶楽部」において、「政治」という「主義」の相対化をも成し遂げているのである。

テクストにみられる「政治の相対化」という問題は、作家・独歩自身の問題とも連動していた。独歩は一九〇〇年頃「星亨と結んで政界に出馬することによって前途打開をはか」⁽¹⁵⁾ っており、一九〇一年六月二一日、その星が暗殺されて挫折したという。その約五か月後に発表されたの

が本作品であった。いわば独歩自身と(政治)に距離が生じたのであり、本作品のもつ政治の問題は、こうした作家論的圏域でも符合がみられるのである。

作者・独歩という存在にもう少し触れておく。独歩と交流のあつた幸徳秋水による書簡が残されている。秋水の著名な文献「自由党を祭る文」⁽¹⁶⁾ 発表の二か月後、一〇月一七日のものである。

〔略〕足下(＝独歩、引用者注)曰ふ伊藤は愉快之老翁と／＼〔中略〕大兄の所謂「愉快」なる生殺しの因循姑息なる伊藤の爲めに／＼我民権運動の大いに緩和され阻害されしを知らざるや／＼宵相見て高教を聞くを得ん哉／＼饒舌多罪〔略〕⁽¹⁷⁾

／＼は改行を示す

幸徳秋水は伊藤を強く批判する。伊藤博文は、幸徳秋水によって「因循姑息」な人物と評され、また自由民権運動を阻害した人間であると断じられるのであるが、独歩は伊藤博文に対して「愉快之老翁」と一定の評価を行っている。しかしそれは政治家としての手腕というよりも、人間としての評価であつたといえよう。一九〇一年三月二〇日の『毎日新聞』には、「政府不信任案に、首相酒気を帯びて反論醉漢伊藤博文の乱言狂語を聴け」という記事がみえる。⁽¹⁸⁾ 一九〇〇年に誕生した第4次伊藤内閣は内部分裂を起こし、翌年五月に伊藤は首相を辞任することとなる。その

ような情勢の最中に起こった伊藤の被酒演説事件は、当時多くのメディアによって批判された。しかし、酒を好んだとされる独歩は自らに似た要素を感じとったのかもしれない。本作品において岡本らが酔いに任せて「演説」を披露する姿は、伊藤博文の戯画化とも思われる。

作中人物は、〈政治〉を大きく主張することはない。(19) 本作品における「明治倶楽部」は、実際のそれに比べ政治性が薄いものになっているが、単に作品から政治性を排除するためであれば、明治倶楽部を作品の舞台に設定する必要はないのである。〈政治〉の相対化・戯画化のためには、「明治倶楽部」という舞台設定が適当であった。〈政治〉の要素を随所に散りばめながらあくまでも〈政治〉の相対化を図る本作品は、〈政治〉との強い緊張関係にあるということができるといえる。

五

これまでに見たような〈政治〉の要素を考慮すれば、「演説」という要素は避けて通ることができない重要な問題として立ち現れる。木村洋氏は、本作品が「煩悶」を主題化した試みであるとしたうえで、次のように指摘している。

そもそも岡本の演説は、「椅子を起つた」という描写があるように、起立するひとりの話者と座るその他の

聞き手という演説会の構図のなかで行われた。(中略) 「牛肉と馬鈴薯」は、ある集団内で孤立した情念を抱え込む岡本にあえて演説をさせ、その頓挫を示した。すなわち、ここでの主眼は、単に驚異思想という岡本および作者自身の思想的信念の披瀝ではなく、そのような思念を抱えもつ煩悶者の困難、つまり自身の内面や経験をけつして集団的なものとして言及し得ない困難を明確化することにあつた。(20)

そして木村氏は「諸君」という不特定多数との共感を志向する演説体は、その性質上けつして岡本のような煩悶者の内面や経験を当事者の立場から報告する言語とならない」と指摘する。しかし先にみたように、「明治倶楽部」は閉鎖的な空間であり「不特定多数」の聴衆が存在する場ではない。この岡本の「演説」に〈政治〉の要素を重ねてみると、また違った景色が見えてくる。一八九六(明治二九)年二月五日の雑誌『太陽』二巻三号には、新聞記者である椋益子(関謙之)による「演説用語の改良を望む」という言説がみえる。(21) 関謙之は「演説用語を改良すること」が今日の急務だと主張し、「聞き慣れざる漢語を己一人承知して揚々と演説中に用うるなどは啻に聞き苦しみならずあなたら大切の趣旨を不通に終らしむるの恐あり」と述べ、議会などの「演説」において難語を用いることに對する批判を掲げている。同時代における「演説」は、煩悶

の告白に適さないのみならず、政治における主張においても「大切の趣旨を不通に終らしむるの恐」がある表現方法だったといえる。政治小説流行の明治一〇年代ごろに全盛の時を迎えていた自由民権運動でも「演説」は多用された。しかしながらそれは、情報の伝達や主張への賛同を第一義においたものでなかったのである。牧原憲夫氏『客分と国民のあいだ 近代民衆の政治意識』には、次のようにある。

民衆が演説会にやってきたのは、自由や民権を論理的に展開するものよりも、「痛切」なる政府批判とりわけ役人・巡査等に対する「壮烈の言辞」（板垣）を聞きたいがためだったのであり、「中略」演説会を芝居・寄席に類する見世物として楽しんでしまう庶民の見物人感覚をみてとることもできよう。⁽²²⁾

また浅野正道氏も、以下のように指摘している。

聴衆たちは大人しく話に集中していることよりも、むしろ賛意を示す「ヒヤ／＼」や否定を表す「ノー／＼」という掛け声をもって積極的に状況に参加することの方を選んでいった。つまり、演説会とは、ただ真面目な言論の場であるばかりでなく、同時に荒っぽくも陽気な愉しみの場でもあったのである。⁽²³⁾

本作品は、登場人物たちが「一所に笑」う結末を迎えている。明治倶楽部において「荒っぽくも陽気な愉しみの場」を提供した岡本の営みは、ある種の成功を取めているとも

いえる。

近藤は、岡本の「諸君にして若し僕の不思議なる願というのを聴いて呉れるなら談しましよう」という前置きに対し、「諸君は知らないが僕は是非聴く」と述べて演説特有の語「諸君」を打ち消し、演説と距離を取ろうとする。しかし、この「演説」との距離感には、近藤個人の問題として——演説の特性に自覚的であった近藤のみが岡本の「苦痛の色」を見て取るという結末から、近藤を「岡本の唯一の理解者」と捉えるといったような——あるのではない。既に見たように「近藤」は「岡本」の「演説」の内容を理解してはいないのである。本作品の「演説」への距離感には、復元する語り手によって作り出された、作品全体に適用された構図なのであって、その構図のなかでは「周囲の無理解」は致命的なものとして存在しない。（復元）する語り手は、明治一〇年代の民権期の「演説」を（復元）しつつ、「政治演説」を戯画化してゆくのである。

民権期の「演説会」についても少し踏み込むと、当時の言論統制という事実に行き当たる。後の治安警察法へとつながる集会条例が一八八〇（明治十三）年に公布されており、民権期の「演説」は、隣席する警官による中止・解散命令と不可分の関係にあったのである。鈴木武史氏は次のように指摘している。

隣監の警官は、集会が治安を害すると認めたとときは、

演説中止、集会解散を命じることができた。演説中、日本政府に対する批判が行われた場合には、ただちに中止・解散命令が発せられるのが通常で、演説者は命令が発せられないような工夫が必要だった。⁽²⁴⁾

先述した通り、実際の「明治倶楽部」は政治性を持った組織であり、一八八九（明治二二）年には集会条例違反の疑いで詮議されている。⁽²⁵⁾ 作中では岡本が「グラグラ政府」などと政府批判を口にするが、当然中止命令が出ることはなく、話の腰を折られながらも岡本は無事語り終えることができている。明治倶楽部において、最後まで語ることの重要さは冒頭部で既に示されていた。

〔略〕上村は逃げかけた。

「いけない、先ず君の説を終へ給へ！」

岡本の登場によって上村の語りは中断されるが、上村は周囲に促され語りを再開させている。これは明治倶楽部のハイコンテクスト性に起因するものである。人力車夫や受付、給仕の存在によって強められる閉鎖性、岡本の「思切った政治をやってみたいといふ希望があるに相違ない」という言説などから判明する同類性、これらの要素を包摂した本作品の「明治倶楽部」という場面設定が、「政治の戯画化」というコードのなかで大きく機能しているのである。

一九〇六年発表の「岡本の手帳」で抜き書きされた手記

は岡本の独白であり、他者に向けられたものではない。岡本自身が「驚異思想」を表出するのは、「明治倶楽部」と「手帳」という閉じられた空間だけであった。一夜限りの明治倶楽部の会話、また極めてプライベートな手記の内容を（復元）する語り手によって、岡本の思想は不特定多数の読者の目に晒されることとなる。その語り手の背後に、作者・独歩の影が見え隠れするのは事実である。しかし作者の問題を関連させるのであれば、独歩が『民声新報』編集長時代、ポンチ絵による政治風刺を積極的に取り入れていた⁽²⁶⁾ことも指摘できよう。本作品は、政治性をもった「明治倶楽部」での会話を（復元）し、岡本の周囲への同化を描き、七名の同類項を掲げていく。それを行なったのは、岡本や近藤に適宜視点を移動させながら俯瞰的な視野を保つ、「討論に参加しない語り手」である。そしてわれわれは、「政治小説」とは性質を異にする、「政治」の戯画化という手法を本作品に見出すことができるのである。

〔注〕

(1) 本作品発表の六年後、雑誌『文章世界』に発表された随筆「予が作品と事実」（一九〇七年九月、博文館）に記されている。（二巻、五二三頁）

(2) 山田博光「牛肉と馬鈴薯」研究ノート（『国木田独歩論考』一九七八年九月五日）一五〇頁。初出は『帝塚山学院大学研究論集 11』（一九七六年十二月）。

- (3) 鷺崎秀一「近代滑稽小説の系譜(2) 国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」」〔『稿本近代文学』三七号、二〇一二年一月〕。
- (4) 中島礼子「国木田独歩——短編小説の魅力——」(二〇〇〇年七月、おうふう) 八九頁には、これによって「読者には岡本についてのほんやりとした輪郭が与えられる」とある。
- (5) 鷺崎氏前掲論文。
- (6) 関肇「アイロニーの機制——国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」論」〔『光華女子大学研究紀要』三六号、一九九八年二月〕。
- (7) 関氏前掲論文。
- (8) 井上明芳「国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」論——独白を生成する会話体構造——」〔『解釈』五七巻七・八月号、二〇一一年七月〕
- (9) 独歩の作品「非凡人」「号外」はいずれも討論小説であり構成が類似していることが指摘されるが(山田氏前掲論文)、二作品とも語り手は討論に参加している。「非凡人」では「(自分も此仲間の一人であった)」と括弧書きが記されており、「号外」では「かく言う自分もさよう、同類と信じて居る」と記述がある。
- (10) 『日本社会事彙』三版(一九〇七年、経済雑誌社)。
- (11) 『國民之友 複製版』(一九六六年、明治文献資料刊行会)。
- (12) 本稿における『朝日新聞』の記事調査にあたっては、「聞蔵Ⅱビジュアル for Librarians」を使用した。
- (13) 内田魯庵「政治小説を作るべき好時機」〔『文芸小品』一八九九年九月、博文館〕。
- (14) 明治倶楽部動向は、『朝日新聞』(東京朝刊)による。「明治倶楽部会合」(一九一七年五月一八日)、「伊藤尾崎会見後聞」(一九〇〇年六月二三日)。
- (15) 北野昭彦「牛肉と馬鈴薯」——〈驚異〉による再生のモチーフ——〔『国木田独歩「忘れえぬ人々」論他』一九八一年一月、桜

楓社)、一四七頁。

- (16) 一九〇〇年八月三〇日、『萬朝報』に発表。自由民権運動の中核を担い、藩閥勢力と対峙してきた自由党の「光榮ある歴史」の流れが潰えたことを嘆く内容である。本作品が秋水の「自由党を祭る文」の翌年に発表されているのは興味深い事実であり、作中の「北海道自由の天地」「冬則ち自由」といった記述との符合が疑われるが、本作品は自由党言説や民権運動の懐古を目的としたものではない。実在の「明治倶楽部」の終末期は立憲政友会の組織と大きく関わっており、一九〇〇年六月には「明治倶楽部」において望月小太郎・竹越與三郎・松本君平らによって伊藤博文推戴の画策がなされている。倶楽部の解散論が生じたのも、進歩党・政友会のとちらにも拠らない新政党樹立を目論んでのことであった。この点に関しては岡本の姿勢「鋼鉄のような政府」作りとの一致がみられる。
- (17) 幸徳秋水の引用文は、『幸徳秋水全集』第九巻(一九八二年四月、幸徳秋水全集編集委員会)によった。黒岩比佐子氏はこの書簡を取り上げて、「独歩は秋水に対して、老練な伊藤の政治家としての力量を、ある程度認めるようなことを書き送ったのではないか」(後掲文献)と推察している。
- (18) 明治ニュース事典編纂委員会『明治ニュース事典』(一九八三年、毎日コミュニケーションズ出版)。
- (19) 本作品に先行する親和性の高い作品、中江兆民『三酔人経綸問答』(一八八七年五月)との大きな差異の一つである。
- (20) 木村洋「時代に煩悶あり——『独歩集』「運命」論——」〔『経世と詩人——明治後半期文学論——』「博士論文文学」甲四八五〇、二〇〇九年二月、七八—八〇頁による〕。
- (21) 雑誌『太陽』の記事調査にあたっては、「JapanKnowledge Lib」を使用した。

